

ライブニッツ『人間知性新論』III-6の対ロック批判¹⁾ —人間の理性と自然的同等性について—

酒井 潔

序

ライブニッツが『人間知性新論』第III部第6章（「実体の名について」）で、ロックの名目論的な「本質」や「種」の観念を批判し、「実在の本質」（essence réelle）を主張する議論は、ロック経験主義とライブニッツ合理主義の対決として知られてきたが、じつは内容的にも外延的にもより切実なものである。両者の念頭にはとくに「人間」の観念がある。「人間」（homme, man）という名で表示される、われわれの心の中で形成されている複合観念とは、どのようにして生じたのか、そしてその意味は何か、つまり「人間」は「何である」と定義されるか。「人間」という名は実在的な意味も本質ももたず、そのつど経験や関心に従って言われるに過ぎないのか。「人間」といっても地域、血筋、姿形などさまざまであり、したがって異なった複数の「人種」に区別されるのか、それとも、すべての人間には、「人間」としての、何らかの或る共通した普遍的な性格、すなわち本質が認められるのであろうか。

1) 本稿は日本ライブニッツ協会 2023 年春季大会シンポジウム「3・11 とライブニッツ」（大阪経済大学 2023 年 3 月 11 日）における筆者の提題（「人間が人間でないリスクー『人間知性新論』III-6 におけるロック批判の今日的意義」）の原稿に修正と加筆を施したものである。

ゴルデンバウムは、2022年1月の論文 *Rationalismus und Empirismus über die natürliche Gleichheit der Menschen*（人間の自然的同等性をめぐる合理主義と経験主義）において、デカルトやライブニッツら合理主義者が、すべての人間は理性的能力をもつ点で同等であり、動物と根本的に異なると主張するのに対し、ロックやヒュームら経験論者は、種の実在的な規定、とくに「人間」という種のそれを否定する、と整理する。そして経験論者には、理性能力という内的性質ではなく、身体（色、姿）など外的な基準に注目して人間を区別する傾向が存する、と指摘する。そこからゴルデンバウムは、チョムスキーを引きながら、じつは経験論の方にこそ、（その名目論の強調により）人間の自然的同等性の制限によって人種差別主義（Rassismus）に導くような議論が見出される、という注目すべき結論を導く。そしてロックとライブニッツの対立も、単に認識論の次元に止まらず、その点からも読まれるべきだと説く（Ebd., S. 79, 117f.）。

本論文では、《事物の本質は実在的か名目的か》という問題が、「人間」の本質や種という深刻な問題意識をライブニッツに呼び起し、ロックに対抗し「理性」を内的基準として主張させるその経緯を『人間知性新論』（以下『新論』）に即して考察する。そして人間の実在的本質としての「理性」を説くライブニッツの合理主義が、存在論的認識論的な立場を意味するだけでなく、〈人種差別主義〉といわれるものに対する理論的防波堤として機能する可能性について考えてみたい。人間が「理性的動物」であることが必ずしも自明ではない今日の状況に鑑み、ライブニッツが提示した「実在的本質」のもつ哲学的意義を確認しよう。

I. ロック『人間知性論』における名目的な「本質」

『人間知性論』（以下『知性論』）第III部「語について」（Of Words）第6章「実体の名について」（Of the Names of Substances）でロックは、「本質」および「種」の観念が人為的なものであり、それに付された「名」

は実在を指示せず、心のもつ観念に与えられた記号に過ぎない、と主張する²⁾。物の「何であるか」は、われわれがその物について懐いている観念に付した名のことである。この観念はさまざまな単純観念(色、形、・・)からなる「複合観念」(complex idea)³⁾である。(例えば、「鉛」の観念は「白濁色」、「一定の重さ」、「硬さ」、「一定の柔軟さ」、「溶解度」から、「人間」の観念は「一定の形」、「運動能力」、「考え推論する能力」などから合成される)。このうち物に属していると人が考えるところの性質が「本質」といわれる。ロックによればこれは「実在的本質」(real essence)ではなく、「名目的本質」(nominal essence)である⁴⁾。そして何が本質であるかは、人が当の物をどう名付けるかもしくは名付けたいかによって決定される。こうして選択された観念のセットが、それらの性質を支え自存する物すなわち「実体」を指す。「実体」の観念に与えられた名(一般名)は、物の「何」を表示し、それを他から区別する。名は「種」(species)を表示するのである。

「本質」は、外見により人が恣意的に選んだ性質の集合に過ぎず、そうした集合に人が与えた名が種に他ならない。何が物に本当に属する本質であるかは人間には知られ得ない⁵⁾、とのロックの主張はAnti-essentialismと称されている。「種」は、本質的とみなされた諸性質をまとめ、それに付された名によってその物を容易に呼ぶ・指す・思い出すこ

2) ライブニッツが読者にロック『知性論』を参照する手間を免じ、かつ的確に批判し得るための工夫から自らの『新論』を、前者と同じ目次で、ロックを代弁するフィラレトとライブニッツを代弁するテオフィルの対話篇として構成したことは周知の通りである。しかしフィラレトの発言は、『知性論』を常に忠実に再現している訳では必ずしもなく、ライブニッツが論争術の見地から適宜編集を加えフィラレトに語らせていることがParmentier(2006)の研究で示された。故に本論文では、ロック説を参照する場合そのつど『知性論』本文に依拠する。

3) ロックは「複合観念」として「様態」(mode)、「実体」(substance)、「関係」(relation)という三種類をあげる。これらの観念はそれぞれ名を付して指示される。単純観念をmindは能動的に結合・配列・抽象し、かくて複合観念はいわばendlessに形成される。

4) 「われわれは実在の本質を知らないからである」(Essay, III, chap. 6, §9)。実在する物が不可知であることは『知性論』全体においてくり返し主張され、本質と種をめぐるロックの名目論の大前提となっている。

5) Essay, III, chap. 6, §2, 3.

とができ、かつこれを別の性質のセット、すなわち別の物から区別せしめる標識である。名は個物を指すのではなく、その本質として人がもつところの「抽象観念」を指す⁶⁾。

人は、物が一定の性質をもち、物の名はその物が実在的に属する「種」に対応すると思いがちであり、そこからさまざまな錯誤が生じる、とロックは強調する。その矛先がとくに向かうのが、（実在的本質とも言い換えられる）「種」の観念である。そして、或る「名」で呼ぶ（或る種に属すと判定する）場合、それが妥当する範囲が元来いかに曖昧であり、人々はいかに当惑するかが、当時人口に膾炙していたさまざまな事例をあげて示される。

このうち最も深刻なのは、「人間」という種または名の場合である。ロックによれば、「人間」か否かを判断する場合もわれわれは外見に頼るのであり、その判断は不確実で人によって異なる。生まれた子の姿形が通常と異なるという理由だけで、洗礼を授けることの可否が争論となった事例、あるいは、生来の異形の故に「人間」であることが疑われたが後に立派な聖職者となったという事例があげられる。逆に、外見は通常であっても理性の徴候を一生示さない者もいる⁷⁾。ロックは、「人間」の種の決定は、幼児時にはまだ判定できないような理性的機能によるのではないと断定する。ここで注意したいのは、人間か否かを外見で判断する危うさの実例を挙げるだけでなく、理性という内的性質を判断の基準にすることを最初から拒否する点である⁸⁾。ロックの狙いは「人間は理性的動物である」との伝統的、神学的な定義の否定にあり、これは（後述のように）ライプニッツの最も抗議する点である。

さて、種の判定に、姿形では不十分なら、生殖（propagation）・血統（pedigree）・生成（generation）ではどうか。ロックは、動物の子が親と

6) *Essay*, III, chap. 6, §4.

7) *Essay*, III, chap. 6, §26.

8) *Essay*, III, chap. 6, §26.

同一種とは言えない場合として異種交合(例: 驢馬と牝馬)を挙げ、実在の種の確定には不十分とする⁹⁾。では「話す」能力はどうかといえば、鸚鵡が人間ではないのは明らかである。こうして外見、繁殖の力能、話す能力等、どれも「人間」を実在的に規定する定義ではない。「人間」とは、心によって恣意的に採用された種の基準の集合(collection)に対する習慣的な呼称に過ぎない。だから種の定義としてそこに考えられている複合観念もその外延は曖昧である。ロックは、「本質」や「種」の観念とそれに付された名にかんする自らの名目主義を、種の観念の内包と外延が確実に知られ得ないとの事実によって正当化しようとする。そして、人間の内的性質について何も確実に知れない以上、「内なる理性」はないとする¹⁰⁾。しかしこれは明らかに独断であるとライブニッツは繰り返し批判する。内的性質が完全には知られ得ず、種の確かな境界付けが困難であるからといって、事物が内的性質や種の境界を持つこと自体までをも否定し去ることはできない。

しかし、以上のいわゆる Anti-essentialism と並んで、ロックにはもう一つの重大な前提が働いているように思われる。それは、種の規定として集められる諸性質が非実在的とされながら、そのリストの一番目には常に色や形という外見が挙げられる点である¹¹⁾。このことはロックが種の異同について外見(色、形)を重視していることを証している。ロックでは、外見の選好¹²⁾は、「人間」の本質に理性的能力を加えることへのつよい拒否と表裏をなす。

9) *Essay*, III, chap. 6, §23. 種の判定が困難な異種交合の例として、「猫と鼠の子」を見た経験や、「人間の女性が西アフリカ産ひびで妊娠した」等の風聞にロックは言及するが、そこには科学的探求というよりは、異様なものへの興味本位ともいえるような好奇心がうかがわれる。ibid.

10) *Essay*, III, chap. 6, §20.

11) ロックのあげる別の例は「金」の観念にその〔名目的な〕本質として含まれる項目であるが、「黄色の」、「一定の重さをもつ」、「展性をもつ」、「溶性をもつ」、「固形」の順で挙げられ、色が第一番目に置かれている。*Essay*, III, chap. 6, §2.

12) 本論文第Ⅲ章; Bracken, p. 55. 『知性論』では物の性質として色や形が最初に登場する。

II. ライブニッツの反論—実在的な「本質」と「種」

ライブニッツにおいて、「実体」はそれ自身において存在するものとして前提されている。われわれの認識はものの受動的な観念と同じではなく、事物を表出する観念によって能動的に形成される。明晰、判明、適切な観念は、実体についてその実在的本質を示す¹³⁾。ライブニッツのこうした実在論的立場は、周知のように、前～中期の『観念とは何か』（1677）、や『認識、真理、観念の省察』（1684）などで確立している。『新論』（1704）は、ロック『知性論』の主張を、そのつど「そうではなく、むしろこうである」と論駁する臨床的論述であって体系書ではない。ただし合理主義的実在論の立場は論駁の基礎であり、要所要所に簡潔に示されている。従来の『新論』研究では、経験主義対合理主義の対立も主に「生得観念」の否定対肯定の対立として見られていた。しかし『新論』の論点にはそうした図式を超えてゆく射程があり、本論文の関心もそこにある。

「名」＝「種」の表す観念集合の意味や、その境界の曖昧さについて人が誤りやすいという現状認識ではライブニッツ（テオフィル）もロック（フィラレート）に同意する¹⁴⁾。名＝種の内容を明確に定義しておかねば、つまり性質のセットを恣意的でなく論理的に決定しておかなければ、同じ語の下で人は違う内容を理解する。「金」の観念は、色を思い浮かべる子供と、展性や価値を考える職人では異なる。しかしだからこそ、われわれは実体の複合観念にいかなるアイテムが入るのか、どのアイテムが実在の本質として機能し得るのか／すべきなのかについて決定しておかねばなら

13) *NE*, IV, chap. 4, §1 ; 「要するに、本質、種、真理を名目的なものとして見做して楽しんでるあなた〔フィラレート〕の友人たちの気持ちには一度ならず私〔テオフィル〕は驚いてるのです」(III, chap. 5, §1)。また次のテオフィルの発言にも注意したい：「私たちの定義が実在的種に基づいていることには変わりありません。というのも現象そのものが実在 (réalités) なのですから」(III, chap. 6, §13; A VI, 6, S. 309, Z. 23-25)。(『新論』の訳文は原則的に米山優訳による)。

14) *NE*, III, chap. 6, §27 (Théophile).

ない。ロックが『知性論』III-6, §26で言及しているような、「人間」であることが疑われる事例は、ライブニッツによれば、われわれのもつ「種」の定義が曖昧で不十分であることを示すに過ぎない。つまり、「理性的な能力」を實在的本質として見失いさえしなければ、われわれは外見に惑わされることなく「人間」と判定してよい¹⁵⁾。「理性」そのものは外に現れず内的な性質であり、その確認には多少の難易はあるものの、しかし十分に確認可能である¹⁶⁾。また、人間以外に理性的動物は見出されていないのだから¹⁷⁾、「人間は理性的動物である」との命題は必然的に真である、とライブニッツは論定するのである¹⁸⁾。

外見上の相違をもって「種」が違うのではないかと疑い、不幸な異常（奇形、異種交配等）を饒舌に列挙するとき¹⁹⁾、ロックは、「種」を名目的に過ぎないとしながらも、じつは「人間」という種を前提し、そこに外見による下位区分を、すなわち「人種」の区別を設けようとする志向をはずらざるも露呈する。ロックは『知性論』III-6, §38では、「種」が自然でなく人為に過ぎないことを言うために、「毛の長い犬」と「猟犬」は、もし「スペイン犬」と「象」が別種であると言えるなら、同様に別種であると述べる。これにライブニッツは『新論』III-6, §38で三倍以上の長さで反論する²⁰⁾。すなわち「種」は（論理学や数学と違って）自然学的には多少の偶有的変化（*changements accidentels*）があっても同一種なのだ

15) *NE*, III, chap. 6, §26, 27 (Théophile).

16) *NE*, III, chap. 6, §22 (Théophile): 「理性よりも人間に内的なものは何もないでしょうし、普通それは十分知られるからです。それ故、顎鬚や尾は理性と同日には論じられないでしょう」(A VI, 6, S. 313, Z. 24-26).

17) *NE*, III, chap. 6, §26 (Théophile).

18) *NE*, III, chap. 6, §13 (Théophile): 「つまり人間という自然学的種 (*espèce physique*) においては理性がそういう確固とした属性 (*attribut*) であり、個体の各々に適合し、常に失われることなくあるのです。もっとも必ずしもそれが気づかれる訳ではありませんが」(A VI, 6, S. 310, Z. 23-25).

19) *Essay*, III, chap. 6, §23, 26; chap. 3, §17: 「あらゆる種の動物に奇形が、また、取り換え子やそのほか人間が生む奇妙な子がひんばんに生まれることは、こうした〔實在の本質〕の仮説と整合できない難問をもたらす」(『知性論』の訳文は大槻春彦訳による)。

20) A VI, 6, S. 325-326.

と述べる。そして当時有名だったベルニエの旅行記²¹⁾に言及する。すなわち、ベルニエがヨーロッパ人、黒人、中国人、アメリカ先住民を皮膚の色で区分し、同一種（une même race）でないと判断した点をライブニッツは批判する。人間の内部にある理性（raison）はすべての人々に見出されるのであり、そこにさらなる分割（sousdivision）を形成する内的徴表はない、ゆえに人間と獣に本質的種差があるのとは異なり、人間を異なる人種に分割することは正しくないのである²²⁾。

通常の姿形ではなく「人間」であることが疑われるとの事例を指し、人間から「人間」でない子が生まれたのかもしれない、と素朴な話法で、「人間」という種を名目化しようとするロックに対し、ライブニッツは明快である。同じ種には見えないということだけから種が違ふと考えるのは科学的にも早計である。「理性能力」という性質の内在が認められさえすれば、洗礼を授けることに躊躇する理由はない。理性的能力の認定可能性にかんしても、その不可知を強調するロックに対し、ライブニッツは楽観的であるようにみえる。動物に一生似たままの人も、それは能力が欠けているのではなく、その発現を妨げる障害によると考えられる²³⁾。理性の内在が確認されないような子供でも或る年齢に達すると理性のはたらきを示すだろう²⁴⁾。いずれの場合も「人間」と判定すべきである、とライブニッツは述べるのである。

好奇心に訴えるような風聞を援用するロックに対してライブニッツは同じレベルで応酬しない。姿形や血筋の異同にこだわるロックとは対照的に、ライブニッツはそもそも外見や血統には関心がないように見える²⁵⁾。ラ

21) François Bernier, *Nouvelle division de la terre, par les différentes espèces ou races d'hommes qui l'habitent, envoyée par un fameux Voyageur*, in: *Journal des Sçavants* 12 (1685).

22) *NE*, III, chap. 6, §36 (Théophile); A VI, 6, 326, Z. 2-12.

23) *NE*, III-chap. 6, §13; A VI, 6, S. 309, Z. 9-10.

24) *NE*, III-chap. 6, §14; A VI, 6, S. 311, Z. 23-24.

25) デカルトでも、色など感覚された性質は精神には属さない。「見ると意識し考える」作用が「思惟」(cogitare)の属性として精神に属する。*Meditationes*, II, AT VII, 28-29.

ライブニッツにとっては、ただ「理性的である」という内的本質のみが「人間であること」の積極的意味なのである。そしてこれまでのところ人間以外に理性的な存在者は知られていない以上、「人間は理性的動物である」との伝統的規定は実在的定義であるとともに、必然的である²⁶⁾、とライブニッツは繰り返すのである。

ところで、外見に従って人種を区別しようとするロックの念頭にあったのはベルニエの旅行記であると推されるが²⁷⁾、これをライブニッツは既に『新論』執筆以前にも批判していた。1697年1月29日/2月8日付Johann Gabriel Sparwenfeld宛の書簡において、或る旅行者は、身体の異なった大きさや骨格に応じて、人間をいくつかの種族、人種、クラス(tribus, races, ou classes)に分割し、それぞれに別の種をあてがった、と紹介し、次のように反論する：「このこと [=人々が異なっていること]は、地球に住む全ての人間は、一つの同じ人種(race)²⁸⁾なのであり、それが、ちょうど動植物が彼らの本性を変化させたり、進化または退化がみられるように、異なった気候によって変化させられるのを妨げるものではない」²⁹⁾。内的本質を度外視し、ただ皮膚の色という外的性質を基準にとって、異なった「人種」(race)に区分するベルニエの方法は、後に

26) NE, IV, chap. 6, §4：人間の定義は外的な姿形によるなら未決定であるが、仮に「想像上のオーストラリア人」がいつかやって来たとしても、また人間を狭く「最低種」とみてヨーロッパ人と同じ種族だと規定したとしても、しかし種族を相互に区別する必要はなく、人間は一つの普遍的な種としてこの地球上で唯一の理性的動物なのだ、とライブニッツは言う。A VI, 6, S. 400, Z. 29-S. 401, Z. 17.

27) ロックは滞仏中にガッサンディ支持者のベルニエに会った。しかしロックはむしろベルニエの東洋学に関心をもち、その旅行記から生涯刺激を受け続けた。ロックの蔵書にはベルニエの著書も、人種差別主義と奴隸制をめぐる賛否両論の諸著作と共に、含まれていた。Cranston, p. 170; Bracken, p. 56.

28) “race”という語は『新論』III-6でも用いられている。ただし、その意味は「人種」というよりは、「血筋」、「血統」に近い。ベルニエが意図したような、「人間」という一つの普遍的な種が皮膚の色で下位区分された「人種」、つまり「種」と「国民」の間に位置するような「人種」の概念をライブニッツは認めてはいないのである。フェンヴズは、ライブニッツでは“race”という術語は“species”と同義の場合にのみ使用可能であると言う。Fenves, p. 84f.

29) A I, 13, N. 329, S. 544f.

“scientific racism”の先駆とも呼ばれる。実際、「理性」という内的本質を「人間」の徴表から除外するならば、人は（植物や動物の種を確認するときのように）、ますます姿形や血筋を詮索するようになるだろう、とライプニッツは警告する³⁰⁾。

ライプニッツでは、すべての人間は、理性を賦与されている点で、本性的に同等である、そしてもし区別があるとしてもそれは彼らの同等な諸能力のその発展の程度—そこには宗教や国家や歴史による差異が含まれる—に過ぎない。一方ロックは「種」の観念の实在性を否定し、含まれる項目は不確定で範囲も曖昧であると強調する。その主眼は「理性」を「人間」の实在的本質から駆逐することにある。内面的本質＝「理性」の捨象は姿形や血統という外面への関心を促し、また逆も然りである。こうしてロックは、「人間」に外見による区別を導入するベルニエに接近する。『知性論』III-chap. 6, §23、あるいはIV-chap. 7, §16でも繰り返される奇形や異種交合、あるいは白人の子供による黒人の判断などの事例において、ロックのスタンスはいかにも傍観者的である。したがってロックは、それらの事例が「人間」に属することは疑い得ない、と決定するためのガイドラインを示すことができない³¹⁾。

次章では、その「平等」理念で合衆国憲法に影響を与えたとも評されるロックが、論理的にではなくとも、その言説の仕方によって人間の同等性を否定し人種差別を少なくとも助長する要素を含むのに対し、ライプニッツの「实在的本質」・「種」の理論はそうしたracismに対する防御であり得る、というその可能性を、ブラッケンを参照しながら検討しよう³²⁾

30) NE. III-chap. 6, §27 (Théophile); A VI, 6, S. 320, Z. 22-25.

31) Goldenbaum, S. 95f.

32) 『新論』III (Des mots) におけるライプニッツの反名目論的、すなわち实在論的な本質概念の主張は、「人間」の観念にかんしては、本論文で言及するように、経験論とracismに対抗する「同等」もしくは「平等」理論の哲学的根拠というポテンシャルをもつが、それにとどまらない。とくに、語の意味の实在性は、ライプニッツの（人工言語とは異なる）自然言語論の要諦であり、私も以前論じたことがある。言葉の意味の名目論（ロック、ソシュール）への対抗としての彼の自然言語論については、酒井（2013）、第9章。

III. 本質・種の経験論的主張と racism—ブラッケンの批判を手がかりに

まず、ゴルデンバウムによるチョムスキーからの引用をみよう。チョムスキーによれば、経験主義（empiricism）は進歩と啓蒙の思潮内の一つの立場として寄与してきたのであり、「経験主義は、初期資本主義にとって強力であった「所有個人主義」との提携によって、帝国の時代には、これにともなう人種差別主義イデオロギーの増大とともに優位に立ったのだ」³³⁾。racism は、もし人が empiricism と一致して“person”を考えるなら容易に言えてしまう。なぜなら、“person”については皮膚の色、性、言語、宗教等が本質と見做されるからである。対してデカルト的の二元論は、人種による権利剥奪や奴隷制の表明に対する穏当な概念的遮断（a modest conceptual brake）を提供する。チョムスキーは「経験主義と人種差別主義の関係は歴史的ではあるが、それは論理的な繋がりではなく、経験主義が人種差別主義イデオロギーの表現を助長してしまうゆえである」³⁴⁾と結論する。

なお、racism の意味にはさまざまなものが考えられるが、ここではさしあたり、《或るグループが、別のグループに対して自らの主張を貫徹したい場合に、後者のもつ可視的な身体的特徴、ないしその inferiority を根拠とする思想》と解しておく。

以下においては、empiricist としてロックに焦点をあて、「人間」の名目的な本質や種をめぐる『知性論』の主張を、ブラッケンの分析を手引きにさらに精査し、そこに含まれ得る racism への志向について考察する：

ブラッケンは *Mind and Language*, 1984 の第3章（“Philosophy and racism”, pp. 51-66）において、『知性論』におけるロックの言説が直接的な意味として racism を帰結するとは言えぬものの、少なくとも「racism

33) Chomsky, p. 130.

34) *ibid.*

〔が自身を正当化するため〕の表現を容易ならしめる要素」として四つの特徴、すなわち①「反本質主義」(anti-essentialism)、②「〔名目的な本質を決定するための〕割り符モデル」(tally-model)、③「〔割り符に含まれる項目に関する選択の〕選好」(preference)、④「空白の板」(blank tablet)の理論、が指摘される、と主張するのである³⁵⁾。

まず①「反本質主義」について、ブラッケンは『知性論』IV-6, 23, 31 (このうちIV-6は§5, 6, 7, 10)などを参照する。ロックは、不可知の故をもって「実体」の実在性を拒否する。例えば「金」という実体の観念のうちに〔実体への〕論理的な接着剤はなく、実在的な本質・種についてわれわれは観念をもつことができない。「人間」という観念も全く同様であり、そこに含まれる諸性質に本質的か本質的でないかの区別はなく、あるとすればそれは人間の恣意による。逆にいえば、色を「人間」のessentialな性質にカウントすることをロックのモデルは除外できない。ブラッケンは、「ロックは、皮膚の色を、人間の名目的に本質的な性質(a nominally essential property of men)に数えることを許すようなモデルを供給する点で、近代racismの発展上枢要な人物である」と述べている³⁶⁾。

次に、②「割り符モデル」とは、恣意的に選び取られた性質のスコアが割り符の一方であり、もう片方が新しく経験される性質であって、両方が合致したときに、人は「・・は何である」と判断する(経験されたものが当の種に属すと判定する)、との謂いであろう。ロックは、real essenceに代えてnominal essenceを主張し³⁷⁾、どの性質がessentialであるかは、心が自分の懐く物の観念(抽象観念)を何らかの種に帰し、これに名を与えることによって定まると言う³⁸⁾。種が同一でも人によって違う複合観

35) ブラッケンはこの四つの要素とracismとの関係について、ロックは自説が、伝統的な用語法においては、人種の区別に与し得たであろうことを認識していた、と言う。

Bracken, p. 53.

36) Bracken, p. 53.

37) *Essay*, III, chap. 6, §4, §24.

38) *Essay*, III, chap. 6, §29; Bracken, p. 55, l. 1-2.

念をもちうる³⁹⁾。割り符モデルは『知性論』においてとくに「人間」に適用されるが、それは人間と動物の区別も困難にしてしまう。割り符モデルによってロックは、伝統の語彙は残しながらも、「実体」から ontological かつ moral な意味を切り離れた、ともブラッケンは指摘している⁴⁰⁾。

③「〔選択の〕選好」とは何か。「人間」という名を付与し得るかを人は通常外見で判断するとのロックの立場では、いかなる外見が、「人間」が指す複合観念に含まれる諸性質の確実な sign であるか決まるまで、人は「人間」についてまぢまぢに語るだけの筈である⁴¹⁾。にもかかわらず『知性論』の多くの箇所では、諸性質の最初に登場するのは「色」なのである。ロックは色について“sensitive”であり⁴²⁾、このことが racism を助けてしまうとブラッケンは指摘する。「人間」という複合観念に含まれる多くの item のうちどれを本質的と見るかは人の「選好」(preference) に委ねられるのであり、ロックにおいてはそれが「色」なのである。①の反本質主義も、②の割り符モデルもそれ単独なら必ずしも racism を意味するものではない。しかし「選好」原理が加わることによって著しくその方向に偏する危険をはらむ⁴³⁾。

最後の④「空白の板」は伝統的な tabula rasa 説にも重なる面をもつ。ロックは、心には先天的には何も書き込まれておらず（生得観念の否定）、人間の相違はただ後天的に環境によって形成されると説く。その点で「空白の板」は「平等主義」または「行動主義」に寄与するよう見える。しかしじつは寄与しない、とブラッケンは言う⁴⁴⁾。なぜなら「白い板」とは、そこに書き込む者を必要とし、彼らに対して人々を逆に順応者と見な

39) 例えば、「金」について子供のもつ複合観念は「黄色に輝く色」を含むだけであろうが、大人や職人のもつ複合観念は「価値」や「展性」なども含む。Essay, III, chap. 6, §31.

40) Essay III, chap. 6, §23; Bracken, p. 55.

41) Essay, II, chap. 6, §12.

42) Bracken, p. 55.

43) Bracken, p. 56f.

44) Bracken, p. 57.

すからである。かくてブラッケンによれば、経験論の「空白の板」理論は、背景に種のヒエラルキーを想定しそれを除去しようとする「ソフト・レイシズム」を誘発するか、あるいはエリート主義に貢献してしまう。後者は具体的には「赤い官僚主義」というイデオロギー支配か、あるいは国家資本民主主義においてテクノラートおよび大企業経営者による「生きた決定形成」の独占を招くであろう⁴⁵⁾、と言われる。

以上の『知性論』の①～④の特徴が racism の表現を助長する、とブラッケンは結論する。さらにブラッケンは、ロック自身が racist であったかについても、アメリカ植民地と奴隷貿易に公的かつ私的にコミットしており、疑いなしとしている⁴⁶⁾。ただ、筆者（酒井）の関心はロックの哲学がその体系の帰結として、racism や植民地とどのような思想的関係を有し得るかにある。その観点からは、ロックの『統治二論』第二篇第5章における自由主義的な私的所有権論の体系は、白人入植者による土地の囲い込みと先住民の排除を演繹しつつよく支持するものであったと考えられるが、既に他で論じたので今は立ち入らない⁴⁷⁾。

再び『知性論』の本質・種の名目論に戻って、もうひとつの注目すべきブラッケンの指摘をみる。ロックは、先述のように、挑発的ともいえる手法で現象主義と名目論を押し進め、複合観念を形成する諸性質は心が恣意的に選択した集合と見なし、その名札が種だとした。しかしそこで使用されている語彙は「実体」、「本質」、「種」など伝統的な術語である。このことは、ブラッケンによれば、「皮膚の色」という property が選好に過ぎないことをカムフラージュする役割を果たす⁴⁸⁾。これに対しデカルト主

45) Bracken, p. 59.

46) Bracken, p. 60. 本論文はロックの経験論の体系に集中するものであるが、ロック自身が人種差別主義者であったか否かについては以前から賛否両論がなされてきた。今その逐一には立ち入らないが、しかし近年の研究、とくに Bracken, Bernasconi&Mann, Därrmann, Goldenbaum らは、ロックが人種差別、黒人奴隷、植民地の実情について多くを知る立場にあり、なおかつ、それらに対する批判や抗議の、すなわち同時代における反 racism の存在も知ったうえで、植民地政策や奴隷貿易にコミットしていたことを、多くの史的考証に拠りながら主張している。

47) 酒井（2021）、第8章-2、3; 酒井（2023. 3.）

義ではそうした flexibility は使えない。なぜなら精神的実体 (res cogitans) に属する属性はただ思惟 (cogito me cogitare) だけであって、色、姿、性、宗教ではないからである。ロックのように、実体の観念を形成する性質は選好の選択に過ぎず、人間の本性についてのいかなる ontological に“real”な契機とも無関係であると見做すことは、人間の自然的同等性を脅威にさらすのみならず、さらには人間の普遍的な道德本性を主張する理論の依拠する枠組みに対する攻撃でもある、と評されるのである⁴⁹⁾。

IV. 人間の自然的同等性へのライブニッツ的視座

まとめよう：実体を「確実に知ることができない」という理由で、実在的な本質・種を否定しようとするロックに対し、ライブニッツの大前提は、外形だけで種を確定し区別しようとするのは難しいが、しかしそのことは、事物が〔知性から独立に〕実在的本質をもち、かつ我々がそれを知り得ることの妨げにはならない⁵⁰⁾、というものである。必要なのは、種の命名やその確かな境界付けのためには、命名のための基準または定義を決定しておくことである。そしてその基準、つまり「人間である」と判定させる徴表は「理性的能力」である。

ロックは本質や種の名目性については多弁であり、人間を統一的な「種」と見るよりも、ベルニエのように外形の差異に応じて下位の人種に分割しようとする。だがライブニッツによれば、「理性的能力」が確認できれば分割を止めて「人間」という「同一の種に属す」と判断すべきである。ライブニッツの関心は差別・分断にではなく、統合・統一にある。も

48) Bracken, p. 58.

49) Bracken, p. 57.

50) *NE*, III, chap. 6, §27; A VI, 6, S. 321.

し、「人間」が、外形や単なる発話行動など経験的な項目のみからなる複合観念の名でしかないとすれば、それは「理性」の基準を下げることを意味するとともに、人は「生まれ」や「外面」に一層注意深くなり、行き過ぎた区別にも走るだろう、ともライプニッツは警告している⁵¹⁾。

ロック『知性論』が含意し得る《隠された racism への近さ》と、その可能性に対するライプニッツの明確な批判の対立は、『知性論』と、その逐条的反論書『新論』との間の、論述の仕方の或る種の非対称にも表れている。今（紙幅も尽きようとしているので）二箇所だけあげよう：

一つ目は、『知性論』III-6, §36 と、これに対する『新論』III-6, §36 である。『知性論』の主張は、事物を種に従って区別させるものは実在的本質ではなく、人が形成する可感的観念のセットで、またありこれに付された名であるという主旨で、計 13 行の比較的短い論述である。対して『新論』の同じ III-6, §36 のテオフィルは詳論しており、アカデミー版で 41 行にのぼる（A VI, 6, S. 325, Z. 3-S. 326, Z. 12）。つまり、そこでライプニッツは、外見に頼ると、人種（race）に、すなわち同一の種ではなく異なった人種（亜人種）に、すなわちヨーロッパ人；中国人；黒人；アメリカ原住民に分割することになるという危険について、丁寧に説明している。

もう一つの箇所は、『知性論』IV-7, §16 と『新論』IV-7, §16 である。『知性論』によれば、複合観念の内容は、画家が目に見えるものを描いた絵と同じであり、それゆえイングランドの子のつくる「人間」の観念においては、皮膚の色は白である（A）、したがって、白の欠如たる黒色の人間（non A）は、矛盾律（“It is impossible for the same thing to be and not to be”）により、人間ではない、とイングランドの子は言い得る。そして目に見えない魂についてはこれを持つとは決して論証できない、という些か際どい表現で畳みかける（*Essay*, IV-7, §16; Fraser, Vol. 2, p. 289, l. 15-p. 290, l. 8）。これに対して『新論』の IV-7 には§16 はない。

51) *NE*, III, chap. 6, §27; A VI, 6, S. 320.

かわりに§19の末尾で、先のフィラレートによる矛盾律の使用を無益として退け、「黒人は理性的魂を持つ。誰であれ理性的魂をもつものは人間である。故に黒人は人間である」という三段論法を披露し、それで十分だとする。そして彼らの誤りは、論理公準の違反などではなく、最も根本的なこと、すなわち、魂の内には意識されない何ものかがあり、魂自身もあるのだということを否定してしまうことにある、と簡潔に指摘している⁵²⁾。

ライブニッツも同時代の植民地や奴隷制について知っていた。しかし植民地については、商人の貿易によって国家の財政を富ませ、「公共の福祉」の増大を目指すという見方であり、またロックのように実際の植民地政策にも関わっていない。奴隷制についても、当時の悲惨な状況を前にライブニッツ自身は距離を取り続けた。だがそれだけではない。生前最大の正義論の著作といわれる『正義の共通概念についての省察』（1703）では所有権＝厳格法の行き過ぎを批判し、慈愛に基づく衡平法さらには神の普遍的正義を根拠として奴隷の所有を明確に批判しているのである。だが、これらについても筆者は既に別稿で論じた⁵³⁾。

さて、以上に見たように、ライブニッツはすべての人間の《自然的同等性》を肯定するのであるが、ではしかし、他のいかなる観点でも人間の同等性を主張しているか、という問いは残る。この点にかんして近年欧米のライブニッツ研究者の間に活発な議論が見られる。ひとつは1671年の*Consilium aegyptiacum*（エジプト計画）の補遺“*Modus instituendi militiam invictam*”（無敵の軍隊を編成する方法）（A IV, 1, N. 18, S. 408-410）にある所謂「マダガスカル島提案」の解釈をめぐる議論である⁵⁴⁾。

52) A VI, 6, S. 427.

53) 酒井（2023）。

54) そこに見られるライブニッツの発言については以下の解釈がある：ルイ十四世の野心の矛先をトルコに移す政治的文脈で書かれている（Strickland）；それはまだキリスト教化されていない異教徒について書かれている（Wilson, Justin-Smith）；前期とは異なり後期のライブニッツは人間の普遍的性格を認識している（Dascal, Perkins）。これらに対して、Kempeはそこにライブニッツの人種差別主義や植民地主義を見ようとするが、以上（本文）

もうひとつは、スペイン人によるアメリカ先住民の過酷な支配は当時多くの批判を受けており、それについて十分情報を得る立場にあったにもかかわらずライプニッツは沈黙していたとする批判⁵⁵⁾である。これらは最近の研究動向を反映した議論でもあるが、ライプニッツ主義の性格を考えるうえで刺激的で暗示に富む。しかし、本論文の主題は人間の「自然的」な同等性であり、それゆえ宗教的、文化的、歴史的な観点による人間の区別やその意味については、また稿を改めて論じなければならない。

結語——Real-essentialism とモナド論的形而上学

ライプニッツの本質・種の実在論は、ロック名目論への批判にとどまらず、さらにライプニッツ形而上学の積極的な主張としての射程をもつ。二点見通しを簡潔に述べておきたい。

ひとつは、チョムスキーが先に引いた著書で⁵⁶⁾、デカルト主義の反経験主義は人間の自由への関心に結びつけられており、より一般的にみて、合理主義者の人間モデルは、活動的で創造的な心を、すべての人間について⁵⁷⁾支持するために採られている、と述べていることに関係する。これをライプニッツに引きつけるなら、実体の自発性、予定調和で強調される精神の独立性、そして自己活動的で世界関係的なモナド概念の体系へ至る発展線上で、能動的表出の理論はまさにロックの受動的な印象の理論に対

で述べたところから、支持できない。

55) Cook (2019) は、ライプニッツがキリスト教の創造論と前進的世界観を絶対視し、アメリカ先住民のキリスト教化を有意義とするあまり、現実の植民地問題には少なくとも盲目であった、と批判する。だがキリスト教の布教と植民地の拡大とは本来は別のものである。

56) Chomsky, p. 130: ブラッケンを引用し次のように言う:「デカルトの反抽象主義と反経験主義は人間の自由への関心に結びつけられている。より一般的には、人間についての合理主義者のモデルは、「外」から「内」へ印銘されるのではなく、影響を振り易いと見做されるのもないところの、活動的で創造的な精神をサポートするために採られた…」

57) Descartes, *Discours de la methode*, 1^{er} Partie: "...la puissance de bien juger, et distinguer le vrai d'avec le faux, qui est proprement ce qu'on nomme le bon sens ou la raison, est naturellement égale en tous les hommes;... (AT, I, 4) [強調酒井]

する批判・超克を通じ練り上げられていったことが注意される。『知性論』の特徴であった「割符モデル」や、観念の含む項目を（合理的知性ではなく）恣意的選択に委ねる「選好」理論を、『新論』でライプニッツが明確に批判するとき、より積極的な前提として、精神（個体的実体・単純実体）の能動性＝自己活動性＝自由という形而上学的主張がそこに機能していることはたしかであろう。

もうひとつは、実在的な「種」の観念という主張は、先行する『叙説』およびアルノー宛書簡で提示された「個体概念」(la notion individuelle)の説とどう関係するのかという問題である。もしライプニッツが「ノミナリスト」といわれ得るとすれば、そこには基本的に二つの面が区別されるだろう。第一は、学士論文『個体の原理の形而上学的討議』（1663）で明示的に示されたように、個は普遍（類・種）が質料によって個体化されるのではなく、その現実存在に伴う全内容（tota entitas）によって個であるという立場である⁵⁸⁾。これはトマスとは異なり、スアレスに近い。中世の普遍論争にあてはめればライプニッツは普遍が実体として実在するとした実在論者（realistae）に対抗し、普遍の自存（subsistentia）を拒否した唯名論者（nominalistae）に属すと見ることができる。類や種ではなく個が実体として自存するというライプニッツの個体的実体は、さらに個体概念説によって内容規定性（realitas）＝可知性（intelligibilitas）という性格を獲得する。しかし内的規定と外的規定のすべてによってのみ個は規定され得るのだとすれば、つまり個は無限性を含むのであれば、個を完全に知りうるのは神だけである。『新論』III-3, §6でもその点が見られており、個体を完全に認識する手立ては、当の事物を保持するのではない限り、有限な人間にはない。そういう意味では「個体概念」説は論理的な厳密さを形而上学において担保するものである。

それでは、ライプニッツ的ノミナリズムのもうひとつの面、すなわち

58) “Omne individuum sua tota Entitate individuatur” (A VI, 1, N. 1, S. 11, §4).

『新論』においてロックの名目論に対置される実在的本質論、「種は人為的でなく自然的であり、実在的である」との主張はどう理解されるのか。「個」の概念を人間は把握することができない。内包の、本質のはるかに少ない「種」や「類」については、観察や定義によってその徴表を決定し、その集合に名を付して、自分の思考や他人とのコミュニケーションに用いる。ここでいわれる種の実在性とは、「金」や「人間」という普遍が自存するとの意味ではなく、観念の思惟内容が意識の流れを超越したノエマとしての独立性をもつとの意味である。この論理的・形而上学的思惟内容⁵⁹⁾としての実在性 *realitas*（事象規定性 *Sachbestimmtheit*、事象内容性 *Sachhaltigkeit*）はライプニッツでも重要な意義をもつ。普遍の実在的観念は、（それが真であれば）個体の完足的概念に含まれる内容の一部を形成しており、神の無限知性によって思惟されている、と考えられる。

このように類や種概念も個体概念の徴表として実在性を保証されるが、ここで注目されるのは、自然学的な経験的な場面については、ライプニッツは時間的な見地を入れ、種の暫定的性格を指摘し、実用的な処置を示唆している点である。種は個の類似であるが、個は形而上学的論理的にはたえず変化し、厳密には相互に僅かな違いもある。しかし自然学的には同一の種と見做してよい。種の観念は、個の規定を不完全にしか把握できない人間のために必要なのである。これに対して神の知性をもつのは、存在以外のすべての規定を含む個体概念、すなわち「最低種」(*species infima*)⁶⁰⁾の観念であると考えられる。だが人間では、日常生活において「何である」という種の判定に際して間違えなければ十分である。しかし

59) これはトマスでは、*res* に対して区別される *ratio*（ものの概念）に相当する。*realitas*（実在性）という術語は *res* に由来し、物が「何々として」有するというその内容を意味したが、近世になると、現に存在することという意味にとって代わられる。ライプニッツの *realitas* には伝統的な *ratio* の意味と、近世以降の現実存在という意味とが共存している。

60) Leibniz, *Discours de Metaphysique*, §9: „il n'est pas vray, que deux substances se ressemblent entierement et soyest differentes *solo numero*, et que ce que S. Thomas assure sur ce point des anges ou intelligences (*quod ibi omne individuum sit species infima*) est vray de toutes les substances, ..“ (A VI, 4B, N. 306, S. 1541).

種の判定が正しい場合、そのことの ratio cognoscendi が個体概念のうちにあるのは言うまでもない。

『新論』III-6, §32 でライブニッツは、種・実在的本質を「類似における可能性」(possibilités dans les ressemblances) と言っている。類や種といわれるものは、ロックのいうような、複合観念に付された単なる記号ではなく、事物の類似を可能ならしめるものであろう。つまり種とは「人間」という名のものを指すのではなく、似ていること (A と B は似ていると認識すること) を可能ならしめる制約なのである。このように、ライブニッツの実在的な「種」は事物について思惟された思惟内容、つまり個体の可知性に属する契機であって、個体的実体の存在や個体概念の説と矛盾するものではない。(『新論』II-22 の「混合様態」の章では、「正義」、「殺人」など道徳や法上の定義の実在性が論じられていることも十分に想起されてよい)。

ライブニッツにとって、物の「何であるか」は、物の「有ること」と同様に、いやそれ以上に存在論の核心的問いであって、種の実在論はまさにそこに関わる。十年後の『モナドロジー』(1714)はこの Was-sein と Daß-sein の総合の試みであるとも見ることができるだろう。

【略記法】

A=Gottfried Wilhelm Leibniz. *Sämtliche Schriften und Briefe*, Berlin 1923-
〔例：A VI, 4, N. 314, S. 1634-1635=第VI系列、第4巻、作品番号314、1634-1635頁〕

【文献一覧】

- ・ A IV, 1, N. 18 : “Modus instituendi Militiam novam invictam” (*Consilium Aegyptiacum*, 1671-1672)
- ・ A VI, 6 (*Nouveaux essais sur l’entendement humain*)
- ・ Gottfried Wilhelm Leibniz, *Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*, übers., eingel. u. erläutert. von E. Cassirer, Hamburg 1971; 『人間知性新論』米山優訳、みすず書房、1988.

- ・ Locke, John, *An Essay concerning Human Understanding*, 2 vols, ed. by A. C. Fraser, Dover Pub., New York 1959; 『人間知性論』(一)～(四) 大槻春彦訳、岩波文庫 1972-1977.

- ・ Bernasconi, Robert & Mann, Anika Maaza, *The Contradiction of Racism. Locke, Slavery, and the Two Treatises*, in: Valls (2005), pp. 89-107.
- ・ Bracken, Harry M., *Mind and Language. Essays on Descartes and Chomsky*, Dordrecht 1983. (Bookreview: Fred D'Agostino, in: *The British Journal for the Philosophy of Science*, Jun., 1986, Vol. 37, No. 2 (Jun., 1986), pp. 249-251 Pub. by Oxford Univ. Press. <https://www.jstor.org/stable/686989> JSTOR
- ・ Chomsky, Noam, *Reflections on Language*, Pantheon Books, New York 1975.
- ・ Cook, Daniel J., *Leibniz on "Advancing toward Greater Culture"*, in: *Studia Leibnitiana*, Bd. 50 (2018) -Heft2, Stuttgart 2019.
- ・ Cranston, Maurice, *John Locke. A Biography*, London 1957.
- ・ Därmann, Iris, *Unendlichkeit. Gewaltgeschichte und politische Philosophie*, 2. Aufl., Berlin 2021.
- ・ Fenves, Peter, *Imaging an Inundation of Australians; or, Leibniz on the Principles of Grace and Race*, in: Valles (2005), pp. 73-88.
- ・ Goldenbaum, Ursula, *Rationalismus und Empirismus über die natürliche Gleichheit der Menschen*, in: F. Beiderbeck/N. Gädeke/S. Waldhoff (Hg.), *Scintillae Leibnitianae. Wencho Li zum 65. Geburtstag*, Stuttgart 2022, S. 77-118.
- ・ Jorati, Julia, *Leibniz on Slavery and the Ownership of Human Beings*, in: *Journal of Modern Philosophy*, 2019, pp. 1-18.
- ・ Parmentier, Marc, *Leibniz lecteur de Locke*, in: F. Duchesneau/ J. Griard (Éd.), *Leibniz selon les Nouveaux Essais sur l'entendement humain*, Montréal/Paris 2006, p. 11-18.
- ・ Sakai, Kiyoshi, *Das thomistische Paradigma von "res-Ratio-nomen" bei Leibniz*, in: Wencho Li /Hartmut Rudolph (Hg.), *Leibniz im Lichte der Theologien (Studia Leibnitiana Supplementa, Bd. 40)*, Stuttgart 2017, S. 19-33.
- ・ Searle, John, Comments on Chomsky's "Rules and Representations", in: *The Behavioral and Brain Sciences*, 3, 1980, pp. 1-61.
- ・ Valls, Andrew (ed.), *Race and Racism in Modern Philosophy*, New York 2005.
- ・ 酒井潔『ライブニッツのモノダ論とその射程』知泉書館 2013.

- ・酒井潔『ライプニッツの正義論』法政大学出版局 2021.
- ・酒井潔「『統治二論』の批判的読者としてのライプニッツ―「所有権」概念を中心に―」『人文』21、2023. 3.